



猫のいない ペットシヨツプ



川路 新吉

猫のいないペットショップ

ぼくの周りにはガラスの壁があった。

そして、壁の周りにはたくさんのお客さん。

最初は視線になれなくて落ち着かったけど、いまではもうそんなことはなくなった。

マナー違反のお客さんがコツコツとガラスをたたく。相手をしてあげてもいいけれど、今はあまり気分がのらない。ぼくはわざとらしく寝息をたてて寝たふりをする。そのうちそのお客さんは興味をなくしてぼくの前から立ち去っていた。

ぼくは郊外のペットショップで暮らしている。

正確にいうと、売られているんだけど。

なかなか大きいお店で、ぼく以外の種類の動物もたくさんいる。

ただ、猫だけはいない。

まあ、考えてみれば当たり前のことなんだけど。

「わあ、すごいや」

新しいお客さんがきたみたい。

顔をあげて声のした方をみると、入り口の近くで、まだ小さい子どもがお父さんに手を引かれていた。

ペットショップには初めてくるのかもしれない。子どもはきょろきょろと物珍しそうにあたりを見回しては、お父さんに質問する。

「お父さん、あれはなあに」

子どものさした指の先には、ぼくのものと同じようなガラスの檻の中に一匹の犬がいた。

「ああ、これはイヌだよ」

「イヌっていうんだ。大きいね」

「ああ、大きいね。チワワだ」

「ちわわ？」

「ああ、このイヌの種類の名前だよ。イヌにはたくさんの種類があるんだ」

子どもは初めてのペットショップに興味津々のようだ。きょろきょろ見回してはお父さんにたずねる。

「お父さん、それはなあに」

「サルだよ」

視線の先にはゲージに入った猿が、おいしそうにバナナを食べていた。

「すごいね、器用だね」

「ほんとに器用だな。私たちとは手の構造が違うからかな」

「じゃ、これはなあに」

子どもは少し小さめのケースを指さして聞いた。

「これはハムスターだ。ネズミの仲間だよ」

「え、これネズミなの」

「ああ、おまえの大好きなネズミだ」

「お父さん、これ飼いたい」

「ほんとうかい？ちゃんと我慢できるかい？」

「大丈夫だよ」

子どもはふくれっ面になって怒った。

でも、彼には申し訳ないけど、ぼくもお父さんの意見に賛成だ。ハムスターが彼らに買われていけないことをつつい祈ってしまう。

あいかわらず子どもの興味は尽きないようで店内を見回している。お父さんも喜んでくれたのがうれしいようで楽しそうにしている。だけど、

「ネコはいないの？」

ふと子どもがつぶやいたその一言を聞いてお父さんの顔色が変わった。

「ネコ？ネコはいるわけないだろう。そんなひどいことを考えてはいけない」

子どもは、ごめんなさいと小さな声であやまった。

そのしょんぼりとした様子は見ていてかわいそうだった。

その後も彼らのウィンドウショッピングは続いた。

目に入るすべての動物に子どもは興味を示して、そのたびにお父さんに質問を繰り返していた。だから、店の奥に陳列されているぼくのところに來たのは彼らが店内に入ってからだいぶたった後だった。

ぼくを一目見ると、子どもはこれまででいちばん物珍しそうな顔をした。

じーっとぼくを見つめる瞳は、まるでずいナイフのようだ。

「お父さん、これはなんていうの？」

子どもがぼくの方を指さしてお父さんにたずねた。

「ああ」

父親はぼくを見上げていった。

「これはヒトという動物だよ」

ぼくを見て子どもの方は興奮しているみたい。しっぽを盛んに振っている。

「なんだかさっきみたサルみたいだね」

「ああ、サルとヒトは親戚みたいなものだからな。だけどヒトはサルよりも賢いんだぞ。信じられないかもしれないけれど、ヒトは数千年前にはこの星を支配していた動物なんだ」

そうやって、ぼくの目の前でお父さんがニャアと鳴いた。

猫のいないペットショップ

<http://p.booklog.jp/book/39930>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39930>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39930>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.